

## 第4回衛星測位に関するワーキンググループ 議事要旨

### 1 日 時

令和7年5月12日（月）13:15～14:30

### 2 場 所

オンライン会議（Teams会議）

### 3 出席者

#### (1) 委 員

中須賀座長、白坂委員、小川委員、小暮委員

#### (2) オブザーバ

海上・港湾・航空技術研究所・坂井領域長、中部大学・海老沼教授、東京海洋大学・久保教授、宇宙航空研究開発機構・瀧口理事、東京大学・五十里准教授、麗澤大学・柴崎副学長

#### (3) 事務局（内閣府宇宙開発戦略推進事務局）

風木局長、渡邊審議官、三上参事官、長谷参事官、岸本企画官

### 4 議事要旨（○：意見等）

#### （1）衛星測位に関する取組方針2025（案）について

事務局から資料1、2に基づいて説明が行われ、委員から以下の意見があった。

○みちびきが安心してインフラ利用されるには、不具合発生時にも途切れないことが肝心で、11機体制を目指す意義は大きい。宇宙産業において、測位が通信・放送を抜いて最大割合を占める有望な領域であること、産業界の利用促進・ユーザー拡大には適切なコスト設定、瞬間性能よりも信頼度向上が求められていること等を踏まえた、ニーズを的確に開発に反映したシステム構築が重要。ニーズ確認にはユーザーの興味を引き出すようなアプローチも重要。

○公共専用信号の運用体制、組織内での情報の取扱い方など、早い段階から検討する必要がある。デュアルユースは、ユーザーの実感まで至っておらず、メーカー側も同様の課題認識を持っており、議論できる場を設けられるとよい。

○レジリエンス面では、みちびきのバックアップとして、衛星測位とは別の技術の活用など、従来の環境整備や人材育成に加えて、総合的な取組が必要。利用だけでなく開発のコミュニティにも力を入れていき、アカデミア内にそういった母体が育つことも重要。また、衛星開発や利用のみならず地上アセット運用に係る人材育成も重要。

○11機体制でのサービス提供の在り方、またサービスを支える将来のみちびきに採用されるような技術の開発など、宇宙戦略基金等の活用も視野に長期的な話を現時点から進めていくと同時に、中短期的な到達目標の整理も開始するべき。また、電離圏活動はサービス性能の制約条件で、次回の太陽活動の活発化が見込まれる

2035～37年頃を待たず、過去のデータも活用して事前に検討しておくべき。みちびきは国内で実用シリーズ化されている貴重なプラットフォームであり、国のプロジェクトとして、研究開発と実用が分断せぬよう、実装と実証もシリーズ内で行われるようになることが重要。